

川尻 秋生

早稲田大学文学学術院

はじめに

千葉県印旛郡栄町に所在する龍角寺は、関東では珍しい白鳳仏を有する寺院である。また、古墳時代から奈良時代にかけての遺構の変遷が近接した地域で確認された事例として、全国的に注目されてきた。

古代の東国に関する研究は数多いが、文献史料は少なく、考古学との協業が必要になる。本報告では、このような現状を鑑み、地域史研究における龍角寺の重要性について、私見を述べることにしたい。

1. 下総国埴生郡の歴史的環境

龍角寺は、古代の行政区画では下総国埴生郡に属する。郷の数は4つしかなく、郡の等級では最小の「小郡」に位置づけられる。

それにも関わらず、付近には、群集墳として著名な龍角寺古墳群、埴輪を持たない最後の前方後円墳の浅間山古墳、そして全国屈指の終末期の方墳で三段築成の岩屋古墳がある。

また、尾上遺跡は、モガリの跡かとも言われる特殊な遺構であり、麻生広ノ台遺跡からは火葬墓が検出された。(白井 2016)

そして、龍角寺が建立された。使用された瓦が、大和山田寺に酷似する八葉単弁蓮華文鏡瓦、と重弧文字瓦の組み合わせである(會津八一の提唱にしたがって、今回は軒丸瓦・軒平瓦とは表記しない)。近年では、この文様の祖型が奈良県桜井市の吉備池廃寺(百済大寺)に溯ることが確認された(川尻 2014)。

浅間山古墳の北には、創建期の瓦を焼成した五斗葺瓦窯址、寺の近くには、次の時期の瓦を

焼いた龍角寺瓦窯址がある。

とくに五斗葺瓦窯から出土した文字瓦は、種類は多くはないものの、7世紀後半でも早い時期のものとしては全国的に希有のもので、近辺の地字名と対比することによって、小さな単位ごとに龍角寺の瓦を負担したと理解されている(山路 2009)。

また、大畑遺跡群は、官衙的要素を持つところから、7世紀末に営まれた埴生評(郡)家と推測されている。

このように、近接した地域に、古墳時代後期から奈良時代までの遺跡が集中的に営まれ、かつ、それぞれが特徴的な性格を持つ事例は、全国的に見ても極めて貴重である。

類例をあえて求めれば、岐阜県関市の弥勒寺官衙遺跡群程度であろうか。

2. 印波国造との関係

こうした龍角寺をめぐる歴史的環境は、古代東国史研究にとって、きわめて重要である。その理由は、乙巳の変(大化改新)の後、政府は、国造のクニを解体し、新たに評を立てるために、使者(東国国司)を派遣したことと関係する(『日本書紀』)。これは、古墳時代以来、クニを支配してきた国造の領域を解体する画期的な試みであった。地方社会では、驚天動地のできごとだっただろう(川尻 2022)。

ところが、このようすを具体的に示す史料は、『常陸国風土記』に限定される。しかも、地域の有力者が中央から派遣されてきた惣領(書紀の東国国司に当たる)にクニの分立を申請し、評が建てられることが簡単に示されているだけ

である。

古代史や考古学に関心を持つ者は、皆この時、実際に在地でどのような動きがあったのか、もどかしい思いでこの史料を眺めてきた。

しかし、このようすをうかがうことができる地域がある。それが埴生地域である。埴生郡の東隣には印旛郡があり、古墳時代前期から終末期まで継続する公津原古墳群が形成されていた。前方後方墳の船塚古墳、終末期の方墳の手黒摩賀多古墳なども存在する。郡名から推測すれば、この地が印旛国造の本拠地であろうと推測されてきた。

ところが、浅間山古墳や岩屋古墳、そして龍角寺の存在から見れば、6世紀末以降は印旛郡よりも埴生郡の方が優勢となる。考古学的にはこの地を印旛国造の本拠地と見るべきなのだ。

6世紀以降、印旛国造の内部に新興勢力が生まれ、最終的に印旛国造を凌駕し、国造職を奪ったと推測される。それが龍角寺を建立した氏族であろう。

細かい考証は省略するが、平城京から出土した木簡により、埴生郡司は大生部直と推測でき、上宮王家との関係が密接であった。6世紀末以降、この地が隆盛した背景には、ヤマト王権と直接つながることができたという大きなアドバンテージがあったと、筆者は推測している（川尻 2003）。

飛鳥時代に建立された地方寺院の多くは、終末期古墳の所在地近くに建立され、しかも突然創建される場合が多い。関東の他の例で言えば、群馬県前橋市の山王廃寺がこれに当たる。

モニュメントが古墳から寺院に移ったと同時に、ヤマト王権と直接結びつく必要があったのだろう（川尻 2014）。

それにしても、4郷しかない小郡で、古墳時代以来、これだけの規模の遺構を作り続けられた原動力、経済的な基盤は何なのだろうか。筆者にとっての最大の疑問である。

集落遺跡がある程度判明すれば、あるいは手がかりが得られるのかも知れないが、現在のところ、不明と言わざるを得ない。

あるいは、農業生産のみならず、周りを湖沼

に囲まれた立地を活かした水運などが大きく関係していたのであろうか。いずれにしても、今後に残された大きな課題であろう。

おわりに

龍角寺を含む一帯が考古学から注目されるようになって、100年ほどの時が流れた。その間にも、龍角寺古墳群は、史跡名勝記念物に指定され、房総風土記の丘資料館が設置された。その後も、遺跡の発掘や測量が頻繁に行われ、古代の埴生郡のようすがかなり鮮明にわかるようになってきた。

その結果、全国的に見ても、古墳時代後期から奈良時代までの遺跡が、狭い地域に連続して存在する遺跡群として、ますます注目されるようになっていく。

一方、個々の遺跡については、多くの研究成果が上がってきたものの、この遺跡全体をどのように歴史的景観として捉えるのかという点は、まだ課題を残しているように思われる。

近年では、遺跡の整備が着々として行われるようになってきた。こうした景観を学校教育や生涯学習にどのように活かしていくべきなのか、我々に課された大きな課題である。

なお、中世の龍角寺については、学問的拠点としての談義寺の問題がある（植野 1996）。この点は、まだ十分研究の手が及んでいないが、今後深化させるべき課題であろう。

引用文献

- 植野英夫 1996「中世下総国埴生庄と龍角寺」『中世東国の地域権力と社会』高科書店
- 川尻秋生 2003「大生部直と印旛国造」『古代東国史の基礎的研究』塙書房
- 川尻秋生 2014「飛鳥・白鳳文化」『岩波講座日本歴史 古代2』岩波書店
- 川尻秋生 2022「国造の世界」『シリーズ地域の古代日本 東国と信越』KADOKAWA
- 白井久美子 2016『最後の前方後円墳 龍角寺浅間山古墳』新泉社
- 山路直充 2009「寺の成立とその背景」『房総と古代王権』高志書院